

大阪東部の里山環境における開花フェノロジーと訪花昆虫相について

長谷川匡弘 (日本生態学会 会員)

はじめに

開花フェノロジーと訪花昆虫相についての調査は、日本においては主に高地草原、温帯照葉樹林、低湿地、亜熱帯林、および温帯二次林等で実施されており、それぞれの環境に特徴的な訪花昆虫相が明らかにされている。一方で、農業にとって訪花昆虫相の多様性は重要であると考えられているが、耕作地における調査は十分にされているとはいえない。発表者は、2010年4月～10月にかけて生駒山地北部の里山環境において、開花フェノロジーと訪花昆虫相について調査を実施した。今回はその調査結果の概要について報告を行う。

調査方法

調査地は大阪府交野市傍示～奈良県生駒市傍示にかけての生駒山地北部の里山環境である。調査はあらかじめ設定した5本のルート沿いにおいて実施した。ルート沿いにある程度まとまって確認される開花植物群落において10分間滞在し、開花植物種の記録、観察コドラートの面積の記録を行い、訪花昆虫の確認・採集を行った。調査は訪花昆虫が比較的活発に活動する9時～16時にかけて実施した。開花植物群落の確認は、野生植物種を基本としたが、可能な場合は畑地の栽培植物種でも観察を行った。また農家の方に、確認されるハナバチ類の状況についてヒアリングを行った。

結果

調査の結果、単独性ハナバチ類・ハナアブ類が特に多く確認され、そのほかのチョウ目、コウチュウ目等の昆虫類の確認種数は少なかった。社会性のハナバチは、主にセイヨウミツバチ、ニホンミツバチ、コマルハナバチの3種が確認されたが、このうちセイヨウミツバチは養蜂業者の巣箱設置期間のみで確認された。このほかの社会性ハナバチとしてはトラマルハナバチ、オオマルハナバチ、クロマルハナバチが確認されたが、確認回数が非常に少なく、周辺より偶発的に飛来したものと考えられた。単独性ハナバチ類は、4～10月にかけてニッポンヒゲナガハナバチ、ケブカハナバチ、ハキリバチ類、コハナバチ類、ヒメハナバチ類、メンハナバチ類など様々な種類が確認された。

まとめ

調査範囲では、4月から10月にかけて様々な営巣形態を持つ単独性ハナバチ類が多く確認され、また、それらに労働寄生するハナバチ類も多く確認されていることから、比較的豊富なハナバチ相を有していると考えられる。一方で、春～秋にかけて連続的に多くの花資源がコロニーの持続に必要となるトラマルハナバチ等は偶発的に確認されるに過ぎなかった。ヒアリングではトラマルハナバチは、かつては普通に見られたようで、近年の周辺の宅地化により、調査地周辺では確認されなくなった可能性がある。